

## 《企画書》

提出者 伊東 材祐（さいゆう）

【タイトル】 『天国5番目の王様』 第一巻 ～ 絆 ～

### 【概要】

本企画は、「欲望が満たされないこと」や「親や周囲の人、社会など外部の影響により形作られた価値観」により傷つき自己肯定感が下がり、罪悪感や生きづらさを抱えながら生きている人が、人との出会いや優しさにふれることにより本来の自分を取り戻すという内容の小説です。物語の設定は、病院や訪問歯科診療の現場で、様々な人物が登場します。たとえば、自分が引き起こした交通事故で同乗の友人を亡くしてしまった入院患者さん。死を前にした老人ホームの入居者たち。夫や家族に尽くしてきた主婦、元教員、離婚経験者、元監察医らです。死を前にした人は何を思い、何をしたいのでしょうか？そこに寄り添う人たちは、どういう在り方で、どんな言葉をかけることができるのでしょうか。

筆者は訪問歯科医師であり、7万回以上の訪問診療で得た、実効性の高い様々な健康情報も自然な形で物語に盛りこんでいます。

### 【想定する読者ターゲット】

- ① 10～90代の男女 物語を楽しみたい人
- ② 家族や職場、友人との人間関係、お金や病気に悩んでる人
- ③ 心に傷や孤独感、罪悪感をもっている人
- ④ 実効性の高い「健康情報」を知りたい人
- ⑤ 「人生とは何か？」に興味を持ち、心や魂が本当に望む道を歩みたい人

### 【構成案（目次）】

- ・「白い粉」
- ・「入れ歯を飲む人」
- ・「医療の天使と悪魔」
- ・「女性と男性のデッドエンド」
- ・「天国5番目の王様」
- ・「若返りの秘薬・病気の特効薬」
- ・「すべてを統合して生きていく」

### 【サンプル原稿】

『天国5番目の王様』 ～ 絆 ～

- ・「白い粉」

透明な袋の中身が、目に飛びこんできた。無造作に患者用テーブルに置かれた「白い粉」。

看護師の大鷹千夏が、患者の息子に病状説明のため病室に入った瞬間だった。

「それは何ですか？」

思わず声がでる。

はじめて母親の面会にきた天野は、黒のダウンジャケットに身をくるみ、個室専用のソファに深く腰かけたまま、目尻の笑い皺をさらに深くし、まっすぐに大鷹の左目を見つめた。そして、口元をほころばせ「これは天然塩です」と答えた。

「天然塩・・・？何に使うんですか？」

「歯磨き粉の代わりです」

「えっ？歯磨き粉？塩で？？まさか、そんな。心不全ですよ。塩なんてダメでしょ…一時は血圧が200もあって、心臓が肥大して、呼吸困難で…やっと落ち着いてきたところなのに」

大鷹は、まじまじと天野を見返した。

よく見れば、テーブルの上には、真新しい歯ブラシも置かれている。

「たしかに、食塩のとりすぎは駄目ですよ。食塩は、人工的につくられた塩化ナトリウムという化学物質ですから。体によくないのはわかります。でも天然塩は、ミネラル豊富で体のバランスを整えますし、しかも歯ブラシにちょっとつけるだけです」

心地よいアルトの声が、個室の空気を振動させる。

「いや、だから、食事や飲水まで制限して完全管理してるのに、塩なんてダメです」

絶対服従とは言わないまでも、大きな病院において、入院患者への医師や看護師の指示は、裁判の判決のような重みを持つ。普段なら話はこれで終わりである。

しかし、天野は、意に介さない。

「ほら、この本にも天然塩はいいって書いてありますよ」

と『おとなの歯磨き』と書かれた本をめくり、大鷹の目に入るように近づける。

反論された大鷹は、カチンときた。

「あのね～、全身バンパンに浮腫んで大きな風船みたいになっていたのが、やっとよくなってきてるの。数値も落ち着いてきたところで、そんなこと言っていると退院できなくなっちゃうよ！」

大鷹は、そう言い捨て、念のためドクターに確認しようと一步下がり、スライドドアを後ろ手に引き病室を出た。

87歳の患者、天野治子は、息子と看護師の話をハラハラしながら聞いていた。

「ちょっと、もう言うのよしてくれない？」

心電図用など様々なチューブにつながれたまま、治子が眉間に皺をよせる。

5日前に救急搬送され、救急病棟から一般病棟に移ったばかりだ。心不全特有のヒューヒューという声、いわゆる喘鳴（ぜんめい）も、ようやく普通に聞き取れる声に戻ってきたところで、もめ事は避けたい。看護師相手ではなおさらだ。

「いやいや、お母さん、普段から減塩醤油使って、みそ汁も汁はほとんど飲まないし、ぜんぜん塩分摂ってないのに、血压高いのおかしいと思わない？塩分が原因じゃないって。逆にミネラル不足の現代人に天然塩はいいんだよ。お母さんの場合、糖分の摂り過ぎで血液がドロドロになってるから血压が自然と高くなるんだよ。だから、本当にやるべきは減糖なの」

「わかったけど、もういい」

治子は、早口で応える。

しかし、わかってないことは、息子にはすぐに通じてしまう。

「京大の世界的に有名な教授が、『人体のことは、本当はよくわかっていない！』って断言してるんだよ。しかも、統計学を極めた見地からすると、医学界で使われてるデータは、おかしなことが沢山あるんだって。たしかに血圧が200は高すぎると思うけど、薬を使って140以下にするのは、87歳には不自然じゃないかな」

計器に示された、上の血圧は162である。

老母は、返事の代わりに、浮腫みと老いで顔に埋もれてしまった眼球を動かし、焦点を息子にあて、目だけで聞く意思を示した。

「年齢が高くなるにつれて、身体がかたくなるでしょ。血管もかたくなるんだよ。かたい血管を押し広げて、心臓から遠い指の先まで血液を届けるには、血圧が高くないと無理なんだよ。身体がさあ、自然と調子がよくなるように調節してくれてるんだよ。だから今の血圧160って、お母さんにはちょうどいい、と俺は思うよ」

老母がじっとこちらに目を向けたまま、口を開いた。

「そういうもんかねえ」

「そうだよ。だって、そもそも日本みたいに急速に超高齢化してしまった社会に、87歳の最適な血圧のエビデンスはないはずだよ。なんでかっていうとお母さんも、8つも薬飲んでるけど、薬の影響があるから正確なデータなんて取れないじゃん。しかも、新薬の承認って1つの薬だけでやってるの。つまり、8つの薬を同時服用しても安全です。と国が承認したわけじゃないんだよ。薬には、相互作用とか副作用もあるし。たとえば、寿司とカツカレーとウナギと味噌ラーメン、それぞれ単品なら美味しいかもしれないけど、ぐちゃぐちゃに混ぜたらどう？食べる気にもならないよね。もし食べたら胃腸にも悪いでしょ」

治子の表情は変わらず、視線を息子に向けたまま、同意も否定もしない。

「確かに薬は効くよね。だけど、薬に頼るばかりじゃなくて、自己治癒力も信じないと。

体には、ちゃんと自分の身体を治す機能が備わっているんだから。他人や社会の言う事ではなくて自分の感覚を信じようよ」

「・・・」

治子は、水が欲しくなってきた。しかし、飲水制限されていて飲めない。もし自分の感覚を信じてしまったら、悲しくなる。無感覚でいないといけない環境にいるのだ。

「それにさあ、この減塩信仰ってどうなんだろうね。たしかに、俺も『食塩』の摂りすぎは良くないと思うよ。だけど、ミネラル豊富な『天然塩』は必須じゃないかな。天然塩を使った『味噌で血圧下がる』のは、まぎれもない事実で、いくつかの大学でも証明されている。なによりも日本人は、古来よりずっと天然塩と共に生きてきた。『敵に塩を送る』とか『塩の道』、『塩尻市』という言葉からも、どれだけ天然塩が生活に必要なだったかわかるよね。だいいち、俺が訪問診療してる患者さんで、しっかり減塩してる人は、みんな体調か機嫌のどっちか悪いの。だから、ご飯にひとつまみ天然塩かけてもらったら、つまり塩の量を増やしたら、みんな元気になって、血液検査はもちろん、認知症状まで改善した人もいるんだよ」

アルプスが7回冠雪すると街にも雪が降る、という風光明媚な土地の湖畔端にたたずむ瀟洒（しょうしゃ）な病院。気温零下の外階段の手すりには水が白く結晶化し、そこから放たれるクリスタルのようなまばゆい輝きが、外の寒さを伝えてくる。

大鷹は、5階から1階に戻り、会計を待つ患者がいるロビーを横切り、エスカレーター

をあがり、無機質だが近代的で、いかにも命を救ってくれるであろう CT 室、血管造影室、核医学センターなどの並ぶ、LED 光で明るく照らされた廊下を足早に通り過ぎ、心臓血管センターに入り、循環器内科医の田中が、診察を終えるのを待った。

循環器内科は、「内科のトップである」というプライドをもった医師が多い。実際、内科は、外科ではないから、投薬による治療がメインで手術はしないのだが、循環器内科では、心臓カテーテル手術などの繊細で緻密、高度な手術もするのだ。しかも命に直結しているため責任も重くプレッシャーもある。その上、24 時間体制で当直や自宅でも呼び出しにすぐに対応しなければならず、労働時間も長い。

しかし田中医師は、60 歳を前に意気軒昂。いつも明るく元気。フットワークも軽い。人望も厚く、従業員 1600 人の 8 階建ての大病院の副病院長の要職についている。

「先生、501 号室の心不全の天野さん、息子さんが面会に来て、歯磨き粉として天然塩を使わせようとしてました。だから、血圧が高いこと、飲水制限までしてることを説明し、やめさせようとしたのですが、息子さんが、天然塩は、体にいいと言い張るので、先生に確認をとりにきました」

「ははは、確認は重要だけど、そんなのビッグホークらしくないねえ。こっちで全部コントロールしてるのに、塩の摂取なんてもってのほかじゃないかな」

田中が、いたずらっ子のように好奇心にあふれた目で、大鷹をのぞきこんでくる。

「先生、そのビッグホークって呼ぶのやめていただけませんか！」

「機嫌悪いねえ〜。まあまあ、大鷹さん、若いのに心電図読み取るのもピカイチだし、まだ 4 年目でしょ。すごいよ。患者さんも、いつも大鷹さんの言う事きくじゃない。なるほど〜、クレーマー的なご家族なのかな？」

大鷹は、天野が何者なのか確信していた。

(続く)

[以上となります。よろしく願いいたします]